

自己統制

	X>メデアン	X<メデアン
上位群	45	5
下位群	4	46

$$\chi^2 = 66.59$$

その他

	X>メデアン	X<メデアン
上位群	45	5
下位群	5	45

$$\chi^2 = 63.36$$

- (3), 検定に不合格の問いを含めた場合の非行の予測
環境では 5つの問いに内的整合性が認められなかった

5表 非行群と正常群の合計失点の相対度数

項目	合計失点 14.50 ~	15.30 ~	16.10 ~	16.90 ~	17.70 ~	18.50 ~	19.30 ~	20.10 ~	20.90 ~	21.70 ~	22.50 ~	23.30 ~	24.10 ~	24.90 ~
非行群				1.5	5.6	6.1	10.1	13.1	14.6	15.2	13.6	6.6	7.1	3.5
正常群	0.5	9.0	15.5	17.5	21.0	15.0	10.5	4.0	5.0	0.5	1.0	0.5		
置賜				1.0	2.0	5.0	9.9	6.9	21.8	10.9	14.8	14.8	7.9	1.0

項目	合計失点 25.70 ~	26.50 ~	27.30 ~	28.10 ~	計
非行群	1.5	1.0	0.5		100.0
正常群					100.0
置賜	2.0	2.0			100.0

②, 非行への確率

性格検査の結果から、合計失点が求められた場合、これをどのように解釈し、また対処すべきか。そこで合計失点から非行への可能性を予測するための目安を、次のようにして定める。

非行群と正常群の度数分布表で、それぞれの階級ごとに、非行群に属する生徒の非行および正常の両群に属する生徒の和に対する割合を求め、これをその階級の非行への確率を示すものとする。たとえば合計失点が 2,260 である生徒は、0.93の確率をもって非行化するものと解釈する。

6表 合計失点に基づく非行への予測表

項目 合計失点	非行群	非行する確率	正常群	非行しない確率
未満 ~ 16.10	0	0	19	100.0
16.10~ 17.70	3	4.3	66	95.7
17.70~ 19.30	23	24.2	72	75.8
19.30~ 20.90	46	61.3	29	38.7
20.90~ 22.50	59	84.3	11	15.7
22.50~ 24.10	40	93.0	3	7.0
24.10~ 25.70	21	100.0	0	0
25.70~	6	100.0	0	0

が、下位検査としての環境はこれが認められたので、以下、40問から得られる合計失点の、非行を予測する程度について検討をしてみることにする。

①, 非行群と正常群の合計失点の分布

非行群と正常群の合計失点を、級間0.80の階級に分けた相対度数分布表をグラフにしたものについてみると、2つのグラフの最頻数に対応する合計失点の間に、相当の間隔のあることが判る。

グラフの交点に対応する合計失点— 19.70によって両群を分けると、非行群では 19.70以上のものが85.5%、正常群では 19.70未満のものが 83.8%となる。今試みに非行への境界点とみなすとき、非行群に属する生徒の85.5%を、正常群に属する生徒の83.8%を正しく指摘し得たことになる。

③, 置賜学院の生徒による検証

研究所の性格検査の合計失点による非行への予測性の高いことは、「非行群と正常群の合計失点の分布」にみられるごとくである。しかし、これは研究に用いた非行群、正常群に対するものであるため、このことによって、ただちに検査の妥当性が保証されたとはいいい得られない。そこで置賜学院の生徒について検査の実際的妥当性を調べてみることにした。

置賜学院の生徒 101名の合計失点の相対度数分布は、5表のごとくである。また先のグラフの交点に対応する合計失点 19.70未満の生徒は 13.8%にあたる数であった。

(4), 内的整合性のない 5問を除去した場合

① 非行群と正常群の合計失点の分布

下位検査環境で内的整合性の認められない 5問を除外した35問による合計失点による、非行群および正常群の相対度数分布は、7表のごとくであり、非行群と正常群の分布の範囲は、それぞれ9.80, 7.75であり、分布の範囲を、問いの数に比例するものとして、先の 40の問いの分布の範囲から推定すると、それぞれ9.17, 6.66となり、これは先の数値より共に小さい。すなわち、5問を除外することによって、合計失点は小さくなるが、散ばりの程度はその割に減少していない。